

帖毎の色彩語の出現頻度から見た源氏物語

浅井 邦彦*

The Appreciation of *Genji-Monogatari* on the Frequency of the Words Expressing Color Used in Every Volume

Kunihiko Asai

The first study of *Genji-monogatari* is *Genji-shaku* written by Koreyuki Sesonji in the last of the Heian era. There are about sixty studies and annotations of *Genji-monogatari* which had been written until the end of Edo era since *Genji-shaku* occurred.

Furthermore, there have arisen so many writings on *Genji-monogatari* since the Meiji era. These writings are available to deepen our understanding of *Genji-monogatari* as the object of the literary study.

Then, one will take the statistics on how frequently the words expressing color are used in every volume to evaluate *Genji-monogatari* in this paper.

はじめに

源氏物語の研究書は、平安時代末期の世尊寺尹行（せそんじこれゆき）作の「源氏釈」が最初とされており、その後、一条兼良の「花鳥余情（かちょうよせい）」（1472年）、本居宣長の「玉の小櫛」（1796年）など明治以前でも60近くの著作物として残されている。

明治以降になると、更に多くの論文が発表されており、この王朝物語は、より多面的に、より深く、研究されてきている。

本稿では、そのような「文学部的」論文とは切り口を少し変えてみた。各帖の色彩語の出現頻度の多少について統計処理をし、その観点から源氏物語全体を見るとともに、特異な帖をピックアップすることを試みた。

* 経営工学科

1. 調査方法

源氏物語各54帖についての色彩語出現数そのものは、弘前大学人文学部日本文化論研究室から立派な報告書として出されている。この報告書は、色彩語以外の仏教関連語、音、香りなどについても、詳細に記されており、源氏物語を研究する上で、貴重なデータベースになっている。当論文でも、この報告書を基礎資料として利用させていただいた。

源氏物語を読んでいて、まず、気がつくのは、帖によるヴォリュームの違いが大きいことである。このヴォリュームを行数（岩波文庫の「源氏物語」）で計ったところ、帖の最大は「若葉上」の1352行、最少は「篝火」の48行で、その比率は約30倍にもなっている。また平均行数は476.9行である。これらの数字から、この物語の帖による行数の「ふれ」が大きいことがわかる。このことを踏まえて、帖毎の色彩語出現頻度を100行あたりの色彩語数として計算した。（表一2 D） また平均色彩語出現数は3.37（100行あたり）である。これを \bar{a} （=3.37）とする。つぎに、各帖について色彩語出現頻度の平均（= \bar{a} ）からの偏差を求めた。（表一2 E）

更に、標準偏差値 σ を求めると2.487になった。これは色彩語出現頻度の帖による「ふれ」の度合いを示している。

このような計算結果から、色彩語出現頻度の多少によって5つのランクに分け、各帖がどのランクに入るかを示した。（表一2 F）

つぎの表一1はそのランク分けの基準であり、この表中のDは各帖の色彩語出現頻度（100行あたりの色彩語出現数）である。

色彩語出現頻度ランク基準表		
ランク	基 準	説 明
――	$D \leq 0.88$	色彩語はかなり少ない
－	$0.88 < D \leq 1.69$	色彩語は少ない
＋－	$1.69 < D \leq 5.05$	色彩語の出現数はほどほどである
＋	$5.05 < D \leq 5.86$	色彩語は多い
＋＋	$5.86 < D$	色彩語はかなり多い

（ 表 一 1 ）

表一1の不等式を構成している数値の意味は以下の通りである。（小数点以下2桁まで）

$$\bar{a} - \sigma = 0.88$$

$$\bar{a} - 0.674\sigma = 1.69$$

$$\bar{a} = 3.37$$

$$\bar{a} + 0.674\sigma = 5.05$$

$$\bar{a} + \sigma = 5.86$$

正規分布していれば全体の50%がこの範囲に入るという確率上の計算値

表一1の各ランクの帖数を表一3に示すとともに、正規分布と比較した。

2. 調査結果

2-1. 色彩語関連一覧表

No	A 帖の名前	B 色彩語の 出現数	C 行数 (「岩波文庫」による)	D 色彩語出現頻度 ($D=B/C \times 100$)	E 出現頻度の平均からの 偏差 ($E=D-\text{平均}:\bar{a}$)	F ランク
1	桐 壺	3	327	0.92	-2.45	-
2	籌 木	6	664	0.90	-2.47	-
3	空 蝉	5	152	3.29	-0.08	+-
4	夕 顔	16	675	2.37	-1.00	+-
5	若 紫	11	718	1.53	-1.84	-
6	末摘花	33	445	7.41	4.04	++
7	紅葉賀	14	384	3.64	0.27	+-
8	花 宴	5	136	3.68	0.31	+-
9	葵	23	629	3.66	0.29	+-
10	賢 木	20	626	3.19	-0.18	+-
11	花散里	0	49	0.00	-3.37	--
12	須 磨	13	580	2.24	-1.13	+-
13	明 石	4	533	0.75	-2.62	--
14	澤 標	11	428	2.57	-0.80	+-
15	蓬 生	1	295	0.34	-3.03	--
16	関 屋	4	63	6.35	2.98	++
17	絵 合	21	236	8.90	5.53	++
18	松 風	6	286	2.10	-1.27	+-
19	薄 雲	11	404	2.72	-0.65	+-
20	朝 顔	9	280	3.21	-0.16	+-
21	乙 女	35	676	5.18	1.81	+
22	玉 鬘	28	586	4.78	1.41	+-
23	初 音	19	184	10.33	6.96	++
24	胡 蝶	21	270	7.78	4.41	++
25	蛭	14	253	5.53	2.16	+
26	常 夏	7	319	2.19	-1.18	+-
27	篝 火	0	48	0.00	-3.37	--

(表 - 2 <1/2>)

No	A 帖の名前	B 色彩語の 出現数	C 行数 (「岩波文庫」による)	D 色彩語出現頻度 ($D=B/C \times 100$)	E 出現頻度の平均からの 偏差 ($E=D-\text{平均}:\bar{a}$)	F ランク
28	野 分	22	247	8.91	5.54	++
29	行 幸	19	381	4.99	1.62	+-
30	藤 袴	10	201	4.98	1.62	+-
31	真木柱	17	517	3.29	-0.08	+-
32	梅 枝	21	267	7.87	4.50	++
33	藤裏葉	29	318	9.12	5.75	++
34	若葉上	40	1352	2.96	-0.41	+-
35	若葉下	59	1332	4.43	1.06	+-
36	柏 木	21	313	6.71	3.34	++
37	横 笛	9	249	3.61	0.24	+-
38	鈴 虫	11	185	5.95	2.58	++
39	夕 霧	26	985	2.64	-0.73	+-
40	御 法	6	238	2.52	-0.85	+-
41	幻	16	292	5.48	2.11	+
42	匂 宮	1	166	0.60	-2.77	--
43	紅 梅	6	187	3.21	-0.16	+-
44	竹 河	12	569	2.11	-1.26	+-
45	橋 姫	9	519	1.73	-1.64	+-
46	椎 本	14	508	2.76	-0.61	+-
47	総 角	39	1193	3.27	-0.10	+-
48	早 蕨	7	243	2.88	-0.49	+-
49	宿 木	50	1244	4.02	0.65	+-
50	東 屋	18	910	1.98	-1.39	+-
51	浮 舟	21	1014	2.07	-1.30	+-
52	蜻 蛉	17	792	2.15	-1.22	+-
53	手 習	26	1040	2.50	-0.87	+-
54	夢浮橋	2	246	0.81	-2.56	--
合 計		868	25754			
平 均		16.07	476.9	$\bar{a} = 3.37$ 標準偏差 = 2.487		

(表 - 2 <2/2>)

色彩語出現頻度のランク別帖数表						
ランク	--	-	+-	+	++	合計
	$\bar{a} - \sigma$	$\bar{a} - 0.674\sigma$	$\bar{a} + 0.674\sigma$	$\bar{a} + \sigma$		
帖 数	6	3	32	3	10	54
割 合 (%)	11.1	5.6	59.3	5.6	18.5	100
比較 正規分布の場合 (%)	15.9	9.1	50.0	9.1	15.9	100

(表 - 3)

2-2. 特徴的な帖

(1) 色彩語の出現頻度の多い帖

最も多いのは第23番目の「初音」で、100行あたり10.33になる。10行に1つ以上も出現している。冒頭は次の通りである。

「年たちかへる朝の空の気色、名残なく曇らぬうらかげさには、数ならぬ垣根のうちだに、雲間の草、若やかに色づき初め、いつしか気色だつ霞に、木の芽もうちけぶり、おのづから、人の心ものびらかにぞ見ゆるかし。」

この帖は、新春を迎えた光源氏が、紫の上をはじめ多くの女性達を訪れる様子や正月の行事の様子が描かれている。華やかで「色」のある世界が描写されている。

次に色彩語の出現頻度の多い帖は、第17番目の「絵合」である。8.96の出現頻度になるが、これは色彩語が約11行に1つつつ出てくることになる。

「前斎宮の御まゐりの事、中宮の、御心に入れて、もよほし聞こえ給ふ。《こまやかなる御とぶらひまで、とりたてたる御後見もなし》と、おぼしやれど、大殿は、院にもきこしめさむ事を憚り給ひて・・・」が書き出しである。

貴族達が絵の優劣を競う遊びの情景の記述が中心になっている帖なので、当然、色彩語は多いが、光源氏はこの絵合に興じつつも、次第に無情を感じ、出家を考え始めるところで終わっている。色鮮やかな世界から陰影深いものへと移っていく様子が描かれている。

(2) 色彩語の出現頻度の少ない帖

色彩語が全く出てこない帖が2つある。第11番目の「花散里」と第27番目の「篝火」(謎)である。これらの帖全体の行数はそれぞれ49行と48行である。このように行数がきわめて少ないこの2つを外すことにする。その結果、第15番目の「蓬生」と第42番目の「匂宮」が出現頻度の少ない2つの帖となる。それぞれ100行あたり0.34と0.60である。実は、この

2つの帖とも色彩語はたった1つしか出てこない。

「蓬生」の書き出しは、次の通りである。

「藻塩たれつつ、わが給ひし頃ほひ、都にも、さまざま思し嘆く人おほかりしを、さても、わが御身のより所あるは、一かたの思ひこそ、苦しげなりしか、二条の上なども、のどやかにて、旅の御すみかをも、おぼつかならず・・・」

この帖は、風変わりな姫である末摘花が、光源氏に疎遠にされ、経済的にも苦しい生活を余儀なくされて蓬が生い茂る荒屋で過ごす暗い生活や、叔母による意地悪い仕打ちの様子を綴ったもので、描写もあるが説明も多い文が連なっている。

「匂宮」は次のように書き出されている。

「光、かくれ給ひにし後、かの御影に立ちつぎ給ふべき人、そこらの御すゑすゑに、ありがたけり。おりぬのみかどを、かけたてまつらむことは、かたじけなし。」

光源氏が亡くなった後という暗い背景の中での人間関係の物語である。薫は名目上、光源氏の子で、実際は柏木の息子という出生の秘密を知っており、このこともあって、暗い性格になっていく。物語は、この薫と、帝の子である匂宮との対比を浮き立たせるとともに、彼等の周囲の人間を巻き込んで、複雑に展開する。

描写よりも説明に重点がおかれている。このことは、色彩語の出現頻度の少なさとの相関を示している。

2-3. 全体の評価

色彩語の出現頻度の分布が正規化されていれば、確率統計的に帖数の50%を占めるはずである【 $\text{平均値}\bar{a} - 0.674 \times \text{標準偏差}\sigma \sim \text{平均値}\bar{a} + 0.674 \times \text{標準偏差}\sigma$ 】の間に源氏物語の帖数は60%も占めている。これは標準偏差が相対的にかなり大きいことを表わしている。ということは、源氏物語は、帖による色彩語の出現頻度の「ふれ」が大きい物語であることを示している。

また、色彩語出現頻度の平均より少ない帖が約60%、多い帖が約40%と計算され、平均が中央から「少ない」ほうに、かなりずれていることがわかる。

これらのことから、源氏物語全体を評価すると、説明の方に片寄りながらも、重点的に色彩語を用いることで、描写の効果を生かしているとみなされる。

参 考 文 献

- 1) 須藤弘敏(編)「源氏物語語彙データベース報告書第2集」 弘前大学人文学部日本文化論研究室 平成3年版
- 2) 山岸徳平(校注)「源氏物語」 叢書 平成7年版
- 3) 中川友長 「統計の一般知識」 中央経済社 昭和35年版

(平成9年9月12日受理)